

資料 1 : Unreachable End Point of Evolution

Adler

Individual Psychology stands firmly on the ground of **evolution** and, in the light of it, regards all human striving as a striving toward **perfection**. Bodily and psychologically, the urge to life is tied unalterably to this striving.

IPAA, p.106

Adler, Der Sinn des Lebens (1933)

個人心理学は進化の基盤にしっかりと立っており、その観点から、人間のすべての努力を完全性への追求とみなします。身体的にも心理的にも、生への衝動はこの追求と不変に結びついています。

Sicher

Extracting Ideals From Reality, p.111.

We live by extracting a part out of reality. What we see as reality a part of the course of **evolution**. We assume an end point of evolution, although we know that it will never come. **The end point of evolution** would be the goal where all deficiencies and defectiveness would end, where **perfection** would be reached.

私たちは、現実のある部分を抜き出して生きています。私たちが現実として見ているものは、進化の過程の一部なのです。私たちは進化の終着点を想定していますがそれは決して訪れないと知っています。進化の終着点とはすべての欠点や欠陥がなくなるゴールであり、完全なものに到達するという状態です。

Reachable and Unreachable Goals, p.113.

This ideal that a person forms for self is **unreachable** because it is an ideal. Strength as such is unreachable, as is kindness, as is beauty. All of these are unreachable ideals of perfection, or Godlike goals.

人が自分に対して形作る理想は到達不可能である。なぜなら、それは理想に他ならないからである。同様に、強さ、親切さ、美しさも到達不可能である。それら全ては到達不可能な完全な理想、あるいは神のような目標である。

Discouragement, p.115.

All these goals that people seek go in the same direction: superiority, security, face-saving, prestige. It is only when people go off the track and think that they have **reached their goals that the fictitiousness of these goals can be seen.**

人が追及する目標はすべて同じ方向に向かいます：優越感、安心感、面子、名声。人が方針を踏み外し、目標に到達したと思うときにこそ、これらの目標の仮想性（虚構性）が見えてくるでしょう。

The Insane, the Neurotic, and the Nervous, p.115.

All goals of personal superiority are unreachable, fictitious, goals of Godlikeness, of perfection, of absoluteness.

個人的な優越の目標はすべて、到達不可能であり、仮想的であり（架空の）、神々しく、完璧な、絶対的な目標です。

Private Logic of Oughts, p.121.

They expect themselves to be far beyond their present point of development. They expect others to see them as having already arrived at the endpoint of their own capabilities. **They then go through life begging for excuses because they have not reached this endpoint of evolution, of perfection.**

彼ら（人々）は自分が現在の発展段階をはるかに超えていることを期待する。他人から、自分の能力の終点にすでに到達しているように見えることを期待する。彼らはそして、自分は発展の終着点、完璧な状態まで至ってなどいないので、言いのがれをして人生をやり通すことになるのである。

資料 2 : Fictitious / Fictional Goal

Fictitious:

- 1 not real or true; imaginary or fabricated
- 2 relating to or denoting the imaginary characters and events found in fiction

Fictional: relating to fiction; invented for the purposes of fiction

Fictitious の方が少し虚構・仮想・架空という意味が強いかな？

Sicher, p.104 脚注 1

1. Adler used the terms fictional goal, fictional final goal, and guiding fiction. See commentary in, "The Fictional Final Goal," IPAA.88-89.

Adler, IPAA, p.88~

When Adler combined the concept of the fiction with that of the goal, as in the fictional goal or the final fictional goal or the guiding fiction, he implied that his view of causality was subjectivistic, that it was deterministic only in a restricted sense, and that it took unconscious process into account.

アドラーが仮想的目標、仮想の最終目標、先導的仮想として仮想と目標の概念とを組み合わせたことにより、彼の考える因果関係は主観的であり、単に限定的な意味での決定論であり、無意識的なプロセスであることが示された。

仮想論+目的論： 目標もまた仮想

- ・主観的な現在から導かれた目標であること
- ・遺伝や環境の影響があっても自分が決めていること（やわらかい決定論）
- ・無意識的な目標であること

資料 3 : The Neurotic and Sovereignty

Sicher, pp.99-100

To see his value challenged, or the fear of being found out as being deficient in what is to him the most important feature in life, constitutes the enormous plight of the neurotic. It drives him into the isolationistic attitude which seems so characteristic in the artful development of a neurotic symptomatology. The longing of every neurotic person is for a frictionless paradise in which he could reign supreme....

自分の価値が問われること、あるいは自分にとって人生で最も重要な特質が欠けていると判明することへの恐れは、神経症者にとってたいへんな苦境です。それは、神経症特有の巧妙な症状である孤立的態度へと彼を追い込みます。すべての神経症者は、自分が頂点に君臨できる軋轢のない楽園を夢見しています。(中略)

The clash between his inner world and an external situation that

threatens the way to a goal of fictitious superiority results in retreat or, as Adler labeled it, “advance to the rear.” In the inner struggle between the hope of retaining his self-image and the fear of putting it to the test dictated by the request of living together, the neurotic chooses isolationism because it allows him to maintain his sovereignty. All his attempts at proving himself “different,” more “sensitive,” valued higher than others, keep him in his imagination, king; but in reality, king on a desert island or master in a mousehole, free from responsibility.

内的世界と、仮想の優越性目標への道を脅かす外的状況との間の衝突は、後退、あるいはアドラーが呼んだ「後方への前進」という結果をもたらします。自己概念を維持したいという希望と、共に暮らすことでそれを試される恐怖との狭間で、神経症者は自分の主権を維持できる孤立主義を選択します。自分が他人と「違う」こと、人より「敏感」であること、人より高い価値があることをあらゆる努力で証明し、想像の中で彼は王でいることができます。しかし現実には、責任を負うことのない無人島の王かネズミの穴の主に過ぎません。

Or the neurotic may seek refuge and try to find strength by joining a crowd, a gang, or some multitude of other neurotics, using conformity with the mass to decrease his own responsibility.... For the neurotic, even a fictitious victory is of value.... But none of these solutions gives the neurotic relief from his feeling of inadequacy. None is cooperative, and without cooperation no creation of value is possible, and therefore no self-realization, no satisfaction, no happiness.

あるいは、群衆やギャングや他の神経症者の群れに逃げ込んで力を得、大衆と迎合して自分の責任を減少させるかもしれません。(中略) 神経症者にとって、架空の勝利でさえも価値があるのです。(中略) しかし、いずれの解決策も、神経症者の無能力感を解消しません。どの方法も協力的ではないですし、協力なしには価値を創り出すことは不可能です。したがって自己実現も満足も幸福もありません。

→ 辛辣です。マヌ・バザーノの論文「他者とは誰か」にも「プライベート・ロジック・クラブ・ラウンジの住人」という言葉がありました。しかしジッヒャーはまた、次のようにも言っています。

The Insane, the Neurotic, and the Nervous, p.116.

There is not a single person who has not developed a nervous character. None of us is perfect and, therefore, all of us will have neurotic traits and be better or badly integrated.

神経質な気質になったことのない人は誰一人としてありません。私たちの誰一人も完璧ではありません、したがって、私たちすべての人が神経症的な特徴を持ち、そして、(人格が) よりよくまとまったり、まとまりが悪かったりします。

資料4 : 「かのように」から考える価値と事実と治療

「アルフレッド・アドラー ～フィクションとしての心理学～」野田俊作, 2004.

『野田俊作論文集Ⅱ』 pp.100-101.

価値と事実とを区別しておこう。価値とは、「かのようにあるべきである」という観念であり、事実とは「このようである」という観念である。価値の領域でファイヒンガーの「かのように哲学」を採用すると、価値相対論になる。すなわち、すべての価値は「かのように」であるにすぎず、仮想であるにすぎない。「絶対に正しい価値」などというものは存在せず、単に相対的に「より便利な価値」があるにすぎない。便利というのは、時代により文化によって違ってくる相対的な基準であるから、すべての価値は相対的である。

(中略)

価値についてはわかったが、事実についてはどうだろう。われわれは客観的な事実を知りうるのか。つまり、仮説と検証にもとづく自然科学的な思考法を信じていいのか。アドラーは、物理学などの物質科学はいざ知らず、こと心理学においては、仮説検証的な思考法は不可能だと考えた。心理学理論は、すべて仮想であり、「かのように」でしかない。

(中略) 原因論的な理論は、単なる仮想であるにすぎない。それが便利な場合には使えばいいが、不便な場合には捨てるべきではないか。

アドラー心理学は原因論的な発想は不便だと考えて、完全に捨てることにした。かわりに目的論的に行動を分析することにした。たとえば、すべての行動には、感情や症状を含めて、無意識的な目的があって、その目的を達成するために作り出され使われているのだと考えるのである。しかし、これも事実ではない。治療的に援助するために有用な仮想であるにすぎない。同様にして、アドラー心理学は、「意識と無意識は対立しているのではなく、分業し協力しているのだ」と考え、あるいは、「人間の行動はすべて社会的文脈の中でおこなわれており、行動の意味は、過去の出来事や、あるいは精神内界の出来事の中で探すのではなく、現在の対人関係のあり方の中に探すべきだ」とも考えた。これらはす

べて仮想であるにすぎない。しかし、治療の中で他者を援助するために有用な仮想である。要するに、アドラー心理学の理論とは、仮想のシステムであって、仮説検証的な自然科学的理論でもないし、また独断でもない。それは有用な「嘘」であるが、「嘘」であることをみずから知っているのである。仮想は「嘘」でありながら、まるで現実ないし事実である「かのように」作用する。アドラー心理学を信じて世界を見ると、アドラー心理学の理論に従って世界が動いている「かのように」見えてくる。もちろん、フロイトの理論を信じれば、そのように世界が動いている「かのように」見える。仮想を離れた現実というものがもしあるとしても、われわれはそれを知ることができない。仮想が現実を作るのであるし、仮想がすなわち現実なのだ。

たとえば、「無意識」という用語の意味は学者ごとに違っている。そこで、その用語を使ったときに、フロイトが使った意味なのか、アドラーが使った意味なのか、ユングが使った意味なのか、その他の意味なのか、そのあたりが対話する両者の間で合意されていないと、対話が成立しない。いや、そもそも、仮想は対話の中で成立してゆくものなのではないか。先に頭の中に仮想があって、それが話し出されるわけではなくて、まずある言葉が使われ、それが対話を通じて次第に意味をもってくるのではないか。そうだとすると、対話に注目しないと、仮想の意味がわからない。これは現代風にいうと、社会構築主義に近い立場であり、心理療法ではナラティブ・セラピーに近い立場である。つまり、ある患者がもっている「かのように」は、家族や社会との対話の中で作り出され、対話の中でリアリティを持ち、対話の中でその力を発揮する。治療者がその対話に加わることによって、次第に人々に共有されている「かのように」が変化して、患者にとっても周囲の人々にとってもより有用な「かのように」に変化していく。それが治療である。仮想がすなわち現実であるとする、対話を離れて人は現実を知ることができない。現実是对話の中で作り出される。